武蔵野聖書講筵　聖霊降臨節祈祷会

ピリポの伝道

――使徒行伝第４～８章――

１９７５年５月18日
小池辰雄

ザ・ドラマ　原始力体　霊言霊行一如　最初の殉教者ステパノ　御霊の内住　按手　エテオピヤの閹人　どん底人　言葉以前の響き世界　絶対恩寵　ピリポと閹人　御霊の人　責任と光栄
祈り

【使徒４】

10 汝ら一同およびイスラエルの民みなしれ、この人の健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘け、神が死人の中より甦えらせ給いし者の名に頼ることを。11 このイエスは汝ら造家者に軽しめられし石にして、隅の首石となりたるなり。12 他の者によりては救を得ることなし、天の下には我らの頼りて救わるべき他の名を、人に賜いし事なければなり』

13 彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕にありし事を認む。……

【使徒６】

1 そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、2 ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差し措きて食卓に事うるは宜しからず。

3 然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。4 我らは専ら祈りをなすことと御言に事うることとを務めん』5 集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、6 使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。

7 かくて神の言ますます弘り、弟子の数エルサレムにて甚だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に従えるもの多かりき。

8 さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、民の中に大いなる不思議と徴と

を行えり。9ここに世に称うるリベルテンの会堂およびクレネ人、アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸会堂より、人々起ちてステパノと論ぜしが、10その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。11乃ち或者どもを唆かして『我らはステパノが、モーセと神とを瀆す言をいうを聞けり』と言わしめ、12民および長老・学者らを煽動し、俄に来りてステパノを捕え、議会に曳きゆき、13偽証者を立てて言わしむ『この人はこの聖なる所と律法とに逆う言を語りて止まず、14即ち、かのナザレのイエスは此の所を毀ち、かつモーセの伝えし例を変うべしと、彼が云えるを聞けり』と。15ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔の如くなりき。……

【使徒7】

51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。52汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』

54人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向かう。55ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、58ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就けり。

【使徒8】

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。

その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。2敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大に胸打てり。3サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出して獄に付せり。

4ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5ピリポはサマリヤの町に下りてキリストの事を伝う。6群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。7これ多くの人より、之に憑きたる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに

因る。8この故にその町に大なる歓喜おこれり。
9ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を驚かして自ら大なる者と称えたり。10小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。11かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。12然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。13シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大いなる能力とを見て驚けり。
14エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。17ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。18使徒たちの按手によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来りて言う、19『わが手を按くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』20ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。21なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、なんじが心の念あるいは赦されん。23我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』
25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。
26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに默すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』
34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就

きてか、人に就きてか、請う示せ』35ピリポ口を開き、この聖句を始として
イエスの福音を宣伝う。36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視
よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』37（なし）38乃ち
命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバ
プテスマを授く。39彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、
閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。40かくてピリ
ポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣伝えつつカイザリヤに到れり。

●ザ・ドラマ

全聖書の中で一番の中心は、何と言っても、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書です。福音書は始めにして終わりです。

旧約聖書の中心はイザヤ書、イザヤ書全66章です。イザヤ書と詩篇のうちどちらかを選べと言われたら、ちょっとある意味においては躊躇しますけれども、しかし、私はもう今はイザヤ書を選びます。旧約聖書全39巻から一つを選べと言われたら、イザヤ書を選ばざるをえない。イザヤ書は66章、旧・新約全部が66巻。ちょうど66章がこの全旧約・新約を代表しているような数を表しているのも不思議なことです。

新約は、これは大変なものでありますけれども、特に我々キリスト者にとって、生活に一番地道に近いところは使徒行伝です。キリスト教会が始まったのはこのペンテコステでありまして、特に使徒行伝におけるペテロとパウロは二つの大きな中心ですが、使徒たちの御霊によるところの展開、これが神の歴史の一番土台をなすところの生ける不立文字、身をもってするところの文字です。我々も身をもってするところの文字を地に残して、足跡を印して天上に行きたいというわけです。することは何をしていてもいい。要するに、そのすること自体が使徒行伝であるということ。このことを特にこれからのキリスト者は自覚しなければいかんと思う。

「聖書研究会」なんてものは遊びごとですね。内村鑑三先生が『聖書之研究』という雑誌を出されたので、無教会はどうも研究に、学者的な方面に傾きすぎている。もう20世紀はいよいよ危機的な様相を示していますから、本当の意味において21世紀を迎えるのは、この使徒行伝的な歩き方をしていくことです。そういう意味において、皆さんは使徒行伝にいよいよ親しんでいただきたい。使徒行伝に親しむその基礎となるものは、何と言っても福音書です。福音書のキリストに親しまなければ、使徒行伝的な歩き方はできないわけです。そして、信仰の重厚な構造を語っているのはパウロの書簡です。それから、どんなに歴史がどうなろうと、もの凄い神の新天新地を約束しているは黙示録です。

どうぞ、そういう気持で読んでください。この聖書はもの凄いドラマですから。「ザ・ドラマ」なんだ。ただ一つのドラマ中のドラマ。シェイクスピアもどんな素晴らしい文学も、

この聖書というドラマにはかなわない。これは詩人が作ったものでなくて、血と涙をもって書かしめられたところのドラマです。しかもこれは、神の絶対次元がこの相対次元に切り込んできて救いをもたらさんとするところの、闇の世界に光が差してこの闇の世を光の世界に変えようとするところのドラマです。どうぞ、聖書は何か教訓の書なんていうことと思わないように。身体をもって読むことです。

●原始力体

今日のようなペンテコステは三大節の最も大事なものであると私は言いました。この時にどうしても来れなかった友人たち、今名前をもって私はそれを覚えてますが、本当に残念だと思います。それぞれの事情がありますが、皆さんは、どうしてものっぴきならない時は、この世のことを本当に棄てて、集会に来なければダメです。それはキリストが、

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」

と言われるので、そのキリストの言葉に――ただキリストが言ったから従うのではなくて――その言葉の中に自分を入れざるをえない、それでなければ自分はやりきれない、人に棄てられてもキリストには棄てられないという、そういう気魄をもって進んでください。いい加減なキリスト教会が何人いようが、そんなものは問題でないですから。あなた方一人びとりが原始力――キリストという原始力、原始力体――原始力をいただいている身体となる。信仰の事態がそこに本当に質的に来なかったら、つまらないです、信仰なんて言ったって。使徒たちはまさにみな原始力体であった。原始力体であったから、この使徒行伝がこのようにして展開していく。しかも、使徒行伝においてその原始力体の最たる者とも思われるところのパウロはどうですか。始めはキリストに逆らっていた。もの凄いドラマが展開している。逆らっていたパウロがひっくり返された。冗談じゃないですよ、これは。

「聖書」という言葉が躓きになるんだね、「聖なる書」なんて言うものだから。何かもったいぶってしまって、棚の上にあげておいてゴミがかかってしまっている。そんなものではないですよ。それだったら塵の書になってしまう。これは毎日本当に、破れて見えなくなるくらいに読まなくては。そういうオラトリオ、劇なんです。もし「聖」の字を付けなくてならないなら、「聖劇」なんです。聖書ではない。これからはもう聖劇と言うことにしよう。そういうドラマ中のドラマです。それで活劇中の人物となる。

今ここにいらっしゃるどなたでも、本当にその気合でこれに臨んでください。もう、これからは、いい加減な会員がいたら、出て行ってもらいますから、そのつもりでいてください。キリストは非常に激しい方でもありましたから、私もキリストの激しさがだんだんまた移って来そうです。ということは何も、審く意味ではないですよ。激しさというものはもの凄い愛を持っている。平伏す者は無条件に受けとっていく。人間小池ではないですから。そうしたらもう本当に、すさまじさの中に本当の喜びがあるんです。

そして、それがまた本当の静けさも――それは大自然と同じでね――無風であろうと、微風であろうと、そよ風であろうと、嵐であろうと、何でもござれです。それに対して本当に順応していける。あなた方はそういう気持でいれば、嵐のときに船が揺れても酔わないから。船の中で波と一緒に波になる。そうしたら、酔わない。どうぞ、そういうことがみんな信仰の世界でもって体験できます。

「いや、こんなになったら酔いそうだな」

なんて思ったら、酔ってしまう。波と一緒に、

「楽しいな」

と言ってやっていればいい。泳ぎの世界でもみんなそうです。波を恐れたらダメ。波に自分を託すことです。

私の言葉の奥の響きを受けとっていくんですよ。

「あれは何を意味しているか？」

なんて、それは意味もあるでしょう。けれども、この響きの気合を受けとっていく。聞き方というのは魂で聞くんです。耳で聞くのではない。自分を明け渡した魂で聞く。よく、「主体的」なんて言って、すぐものを批判的に聞いたり見たりしている人がある。そういう人は伸びない。自分を本当に託していくと――うそものだと託せないんです――本ものだと必ずそれに響きが来る。そして、その本ものの響きを受けとっていく。そうすると、その人はグングン伸びていく。私がいい加減な話をしているなら、こんなことを言いませんよ。けれども、キリストに乗っかって、御霊の世界に乗っかって、ものを言っているんだから。皆さんが本当に一緒になってその世界に入っていかなければつまらないですよね。

●霊言霊行一如

それでは、使徒行伝に入ります。私は全然、順序なしに今これから話します。

この聖書を私はもう何年読んでいるかね。バラバラになって、ひどい聖書です。ところが、この聖書は、私はこうやって開いただけで、自分の身体の延長で何とも言えない。日本語の聖書で結構です。ギリシア語もヘブライ語も要らない。昨日は私はアラビア語の旧約聖書を探してきた。おもしろい。前にアラビア語をちょっとかじったことがある。今はあまり読めませんけれども。読めなくたって、これを開いているうちに何となくわかってくる(笑)。あなた方は日本語の聖書の奥を読まなくては。根源語を、本当の神語を、神の言を、神言を読む。

今、私は開いたところが４章なんだ。そうすると、パッと目に映るのは、

「**無学の凡人**（ただびと）」

という字です。４章13節。ペテロは無学の凡人なんです。

「学問がなくては」

とか、

「ギリシア語やヘブライ語ができなくては聖書が読めない」なんていうことはない。あなた方はどうぞギリシア語やヘブライ語が堪能な人とコンクールしてください。御霊で勝つから。

この「無学の凡人」なるペテロ、これに聖霊がかかってきた。そしたら、彼自身が霊言そのものとなってきた。霊言、霊行とでも言いますかね。「霊行」なんていう言葉は今日初めて使う。そのように出てくるからしょうがない。さきほどの、

「我を視よ。イエス・キリストの名によりて歩め」

というのは正にこの霊行の世界です。霊言霊行一如の世界です。キリストの名が彼の中において発動しているわけです。このペテロが無学の凡人であった。パウロは優秀なエリート中のエリートであった。ペテロとパウロとはコントラストをなしている。けれども、人間的なそういったパウロの智慧だとか、またパウロのユダヤ教におけるところの実存だとか、そんなものは問題でない。パウロはみんなひっくり返されてしまった。

「律法の義なんてものはとんでもない間違いだった。これを塵芥（ちりあくた）の如く思う」

と言って、彼は棄ててしまったでしょ。無学の凡人の親玉になったところのイエス・キリストはどうかというと、

「11**このイエスは汝ら造家者（いえつくり）に軽しめられし石にして、隅の首石（おやいし）となりたるなり。**」（**使徒行伝４・11**）

と書いてある。けれども、ちょっと見てくださいよ。４章10節に、

「10**汝ら一同およびイスラエルの民みなしれ、**

ペテロの権威ある言葉ですよ、

この人の健かになりて汝らの前に立つは、ナザレのイエス・キリスト、即ち汝らが十字架に釘（つ）け、神が死人の中より甦えらせ給いし者の名に頼（よ）ることを。」

（**使徒行伝４・10**）

とここにも書いてある。

「イエス・キリストの名によってこの生まれつきの跛者は立ったんだ」

と。ペテロが「名」と言うときに、いかにそれが空名でないか、実名であるか。キリストそのものである。御霊のキリストです。キリストは、御霊に在って呼びたてまつるときに、直ちに現在したもう。そういう「キリストの名による」ということです。

そういうペテロである。このペテロの使徒行伝の事態は、その言葉といいその行為といい、実に霊言霊行の権威をもってやっている。福音書における。ペテロは躓いたり転んだりして、もう全然ダメです。福音書においてはもちろんキリストだけです。キリストといかに他の使徒たちと――他の者たち、パリサイも何も全部――もの凄い非常なコントラストをなすか、もう全然次元がちがう。だから、ドラマだと言っている。いい加減なドラマとちがう

んです。

●最初の殉教者ステパノ

そこで、ちょっと6章のところに来てみます。

「1**そのころ弟子のかず増し加わり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施済に漏らされたれば、ヘブル語のユダヤ人に対して呟く事あり。**

だんだん、弟子の数が増してきた。「ギリシヤ語のユダヤ人」というのは、「ヘレニスティース」といいまして、ここに出てくるところのステパノとかピリポがみんなこのヘレニスティースで、ギリシア語を使うところのユダヤ人です。

2**ここに十二使徒すべての弟子を呼び集めて言う『われら神の言を差し措きて食卓に事うるは宜しからず。**

3**然れば兄弟よ、汝らの中より御霊と智慧とにて満ちたる令聞ある者七人を見出せ、それに此の事を掌どらせん。**4**我らは専ら祈をなすことと御言に事うることとを務めん』**

「御言に事うること」というのは伝道のことです。

5**集まれる凡ての者この言を善しとし、信仰と聖霊とに満ちたるステパノ及びピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、バルメナ、またアンテオケの改宗者ニコラオを選びて、**6**使徒たちの前に立てたれば、使徒たち祈りて手をその上に按けり。**

7**かくて神の言ますます弘り、弟子の数エルサレムにて甚だ多くなり、祭司の中にも信仰の道に従えるもの多かりき。**

8**さてステパノは恩恵と能力とにて満ち、**

キリストの恩恵と聖霊の能力にて満ちて、

民の中に大なる不思議と徴とを行えり。

このステパノは使徒の先駆者です。

9**ここに世に称うるリベルテンの会堂およびクレネ人、アレキサンデリヤ人、またキリキヤとアジヤとの人の諸会堂より、人々起ちてステパノと論ぜしが、**10**その語るところの智慧と御霊とに敵すること能わず。**11**乃ち或者どもを唆かして『我らはステパノが、モーセと神とを瀆す言をいうを聞けり』と言わしめ、**12**民および長老・学者らを煽動し、俄に来りてステパノを捕え、議会に曳きゆき、**13**偽証者を立てて言わしむ『この人はこの聖なる所と律法とに逆う言を語りて止まず、**14**即ち、かのナザレのイエスは此の所を毀ち、かつモーセの伝えし例を変うべしと、彼が云えるを聞けり』と。**15**ここに議会に坐したる者みな目を注ぎてステパノを見しに、その顔は御使の顔の如くなり

き。」（使徒6・1～15）

ステパノの顔が聖霊で輝いているわけです。それで今度は、ステパノは大祭司の前で大演説をしてしまった。これが7章全部です。イスラエルの歴史を全部ここで語ってしまった。アブラハムからずっと書いてある。アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセと。そして、51節、

「51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。52汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』

預言者たちだけが聖霊に従っていたけれども、頑迷で「心と耳とに割礼なき者よ」と。いわゆる割礼なんか、そんなものは問題ではない。本当に心と耳とに割礼があるかと。

「汝らは常に聖霊に逆らう」

というこの言葉。今のキリスト教界に対しても、ある角度からこういう響きが来ざるをえない。ステパノから言われているかもしれない。

「キリスト教徒といいながら、なにごとだ。聖霊をなみしているではないか」

と。「逆らう」までいかない面もあるでしょうけれども。

それで、そう言われたものだから、またいきり立ってしまった。

54人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向かう。55ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、

「とんでもない瀆しごとだ」というわけだ。

58ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという

パウロです。

若者の足下に置けり。59かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠りに就けり。」（使徒7・51～60）

十字架上のキリストの言葉がそのままでました。

「父よ、わが霊を受けよ。汝にゆだぬ。彼らに罪を負わせたもうな。赦してやってください」

と。これは自然にでてきた。迫害され、石で撃たれ、殺されながら、「彼らを赦せ」と言うんです。最初の殉教者です。正に道に殉じた者。ところが、それをよしとしていたのが、

誰あろう、パウロであった。８章、

「 1**サウロは彼の殺さるるを可しとせり。**
その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は
皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。 2**敬虔なる人々ステパノを葬り、**
彼のために大に胸打てり。 3**サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出**
して獄に付せり。

と、まだあいかわずやっている。

●御霊の内住

ステパノのあとにピリポというのが出てくる。８章９節、

9**ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を**
驚かして自ら大なる者と称えたり。

これは魔術者だね、ある霊的な術を使う。

10**小より大に至る凡ての人つつしみて**

「つつしみて」ではない。「心ひかれて」ということ。

之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。 11**かく謹みて聴けるは、**
久しき間その魔術に驚かされし故なり。 12**然るにピリポが、神の国とイエス・**
キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテス
マを受く。

ここに「神の国とイエス・キリストの御名とに就きて」と書いてあるけれども、神の国とイエス・キリストの中に自分があるから語れるのであって、外から「について」語っているのではない。これはキリストの名に在って、名を語っているんです。名になければ語れない。我々の魂の中にキリストの名が刻まれていなければ、御名を唱えてもダメです。御国が来てなければ、

「御国を来らせたまえ」

と祈ってもダメ。即ち、私たちに御霊が内住していれば、御国は来ているんです。

「歴史の終わりには必ず神の国は来る」

ということの、この芥子種のごとき存在は、私たちの中に既に形成されてある。

「天国はわがうちにあり」

ということです。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国は汝のものなり」

という。あれはマタイ伝では、「その人のものなり」と書いてあるけれども、「その人」と読んでいてはダメですよ、あの「その人のものなり」は「汝のものなり」と読まなければ。だから、ただ聖書を外側から読んでいたって、それは

「**儀文は殺し、霊は活かす**」

というわけです。「その人」は今度は「汝」となり、「わがうちに」となってくる。どしどし切り込んで読んでいかなくてはダメです。私の魂は浮いたことでは満足できないようにできている。

「まぁ、よくそれで平気な顔していますね」

と私は言いたくなるんだよ、正直。

御意が現ずるところが神の国です。御旨の行われるところが神の国です。地理的な場所ではない。

「極楽は東にあらず西になし、来た道さがせみんな身にあり」

という。極楽はみんな身の中にある。「天国は東にあらず西になし、来た道さがせみんな身にあり」、東西南北いずこにもなしという。どこにあるか。真ん中にある。東西南北を支配しているところに、東西南北の中心にある。

もう豁然としたですか、それで。

「さて、私の身の中にあるだろうか？」

なんて、そういう疑問がちらっとするのではないですか。まぁ、もう少したってからやりましょう。

13 **シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大なる能力とを見て驚けり。**

という。ピリポ自身も驚いているんだ、自分で。

14 **エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15 彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16 これ主イエスの名によりて**

非常にこの「名」という字が出てきます。

バプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。

しかし、ここのところは、「名によりて」が本ものになっていないね。本当に名によれば、聖霊が来るわけですけれども。

●按手

17 **ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。**

同じ名を唱えても、いい加減な唱え方と本当の唱え方とでは中身が違ってくる。同じことを言っても、頭でものを言っているのと腹の中から言っているのは違うのと同じことですから。

「按手」ということ。手を按く。時々、按手を私もしてあげますけれども。これは御霊が伝わる。私が按手をするときに、私は頭の上には按かない。だいたい、背中に、脊椎骨に按く。

頭の上にはキリストの御手が来ます。私が按手するときには、皆さんは、背中に私の手と、イエス・キリストの御手が、見えざる御手が自分の頭の上に来ていると思っていただきたい。自分でも按手できるんですよ、キリストの御手を瞑想しながら。

信仰の本当の世界は、

「こういう条件でなければいけない」

ということはひとつもない。まぁ、どうですか、ヘレン・ケラーなんていう人は目が見えず耳が聞こえず口が言えず。けれども、彼女は信仰の本当の世界に入った。物理的な、あるいは理性的なそういった法則の世界ももちろんあります。けれども、霊の法則の世界は、何と言いますか――芸術でもそうですよ。この頃あるじゃないですか。口でものを描いて、絵葉書にできている。よくあれだけのものを描くと思って驚きます。手がなくなれば口で書く。口がなくなって何もできなくなれば、一番最後は祈りの世界です。祈りの世界が最も素晴らしい。絶対無条件の祈りの世界が実は最高の世界、最大の世界なんです。

キリストはいかなる人であったかというと、祈りのひとであった。祈りで神と一つになっているひとである。

「信ずることは祈ることなり」

と言ってもいいくらいです。そこには本願の力が直ちに働く。こっちの力ではない。本願の力が働くんだから。地球の向こう側の世界が実は最高の世界、最大の世界なんです。それくらいなわけですね。時には夢枕に立ったりする。

ゲーテなんていう大詩人も、実は霊の世界でそこまで食いついたら、もの凄いことになったと思います。その点は、ゲーテさんもおしかった。しかし、彼はかなり深い世界に、一如の世界に入った男ですけれども。彼は異言の体験もあるんですよ。

18 **使徒たちの按手(あんしゅ)によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来(きた)りて言う、**19 **『わが手を按(お)くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』**

聖なるものを金でもって得ようとするのを「シモニア」という。ダンテの『神曲』の地獄のところに出てくる。御霊の世界はそういうところではない。金では買えない。だから、ペテロは怒って、「悔い改めて主に祈れ」と言った。

20 **ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物(たまもの)を得んと思えばなり。**21 **なんじは此の事に関係(かかわり)なく干与(あずかり)なし、なんじの心、神の前に正しからず。**22 **然ればこの悪を悔改(くいあらた)めて主に祈れ、なんじが心の念(おもい)あるいは赦(ゆる)されん。**23 **我なんじが苦(にが)き胆汁と不義の繋(つなぎ)とに居るを見るなり』**24 **シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来(きた)らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』**

シモンは、悪かったと、そこで詫びているようなわけです。

●エテオピヤの閹人

私が今日これからやろうというのはその後からです。

25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。

26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』

ピリポは北の方へ向かっていたんですよ。それを逆行せよと言う。エルサレムよりかまだ南の方、エジプトの方へ行く途中にこのガザという所がある。

27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、

女王の通称を「カンダケ」という。エジプトの王様のことは「パロ」というでしょ。「閹人」というのは昔の中国でいえば宦官です。

礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。

イザヤ書もこれは第二イザヤのところらしい。イザヤ書40章から55章です。

29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』

おもしろいでしょ、お互いに示されている。あの馬車に近寄りなさいと。

30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う

これはギリシヤ語訳でしょうね。

『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』

ちょっと分かりませんよと。

而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。

これは劇的な、一幅の絵を書きたいところですね。和服を着ていていいから、日本のどこかの風景と同じようにして描く。表現はもういいんですよ、なにも歴史的な考証をする必要はひとつもない。その気合がわかればいいんだから。レンブラントの絵だってそうだよ、あれはオランダの風俗ですからね。

●どん底人

32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、

これは「七十人訳」の53章の8節です。

羔羊のその毛を剪る者のまえに黙すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』

34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就

きてか、人に就きてか、請う示せ』

と。では、イザヤ書53章を開きます。

「[1]**われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、**
エホバの手はたれにあらわれしや。
「エホバの手」はむしろ「エホバの腕」と訳した方がいいくらいです。
[2]**かれは主のまえに芽えのごとく、燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。**

これは根っこですね。

われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艶色なし。」（イザヤ53・1～2）

そういった面影がない、見栄えのない人だという。

「枯木龍吟」というが、枯木みたいですね。『碧眼録』に出てくる有名な言葉です。枯木の姿がちょっと龍のようである。風が吹くとその枯木にふれて、ある響きを発する。それを「枯木龍吟」という。天津風によって響きを発するんですから、枯木龍吟というのは自分の声ではない。

尺八もそうだそうだね。

「尺八を吹く呼吸は、自分で吹こうとしたらダメだ。この宇宙の大気をしてこれを吹かしめようとする気持でやれ」

という。これは私はいつか、東海道線で隣になった人とお話しているうちに、

「あなたはどういうことが趣味ですか」

と聞いたら、尺八だと言うから、

「尺八を吹くこつはどういうところにあるんですか」

と聞いたら、その人がそう答えた。私はこの言葉は忘れない。

私は電車に乗ると、大体隣の人と話をする。自動車に乗っても、運転手と必ず話をする。なぜ、みんなよそよそしくなるんだろうね。本当に世界中誰でもが兄弟姉妹という気持につきぬけてごらん。ただし、変なやつに何でも言う必要はないよ。それは、

「蛇の如くさとく」

という面も必要ですけれども。ちょっと、話しかけると分かるんです、その人の答の仕方で。変なことを言ってきたら、もう黙ってしまえばいい。それを遂げおおせるかどうかは、聞いていると分かる。まぁ、ちょっと我々くらいの年配にならないと無理かもしれないけれども。若い人があまりいきなりやったら、「生意気だ」なんて言われるから、すぐ真似しない方がいい。「ああそういうこともありますか」と、まず聞いておく。余計なことばっかりしゃべってますが。

「[3]**かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり。また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。**

不思議な言葉ですね、このイザヤ書53章というのは。なんといっても、聖書は不思議な書です。人間の思想ではない。「聖書の宗教思想」だなんてバカなことを言う。神の言葉は宗教思想ではない。ひとの悲しみも苦しみも、情感も、みなこれをミットライデン、同感共苦することのできる人。ひとのどん底に立つ人。これはどん底人だね。こういう言葉をセンチメンタルにとってはダメですよ。私は無教会時代に多少これはセンチメンタルに響いた。そして何か、そういった悲しみの憂鬱な人が慕わしいようにね。そうじゃないんです。

われらも彼をとうとまざりき。」（イザヤ53・3）

この人はひとの病を負い、ひとの苦しみを負い、担っている人なんです。自分自身がダメなんじゃない。パウロが言ったでしょ、

「[22]**弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んがためなり。我すべての人には凡ての人の状に従えり、これ如何もして幾許かの人を救わんためなり。」**

（コリント前9・22）

と。コリント前書の9章にある。バラを見ればバラとなり、シャクヤクを見ればシャクヤクとなり、テッセンをみればテッセンとなり、なんていうわけだ。そういう自在な魂です。青葉を見れば青葉となり、青虫となりと。私は本当にそういう気持になる。変なやつだね、少し。どうしてこんなことになったかと思う。それはなぜなるかというと、愛するからです。その愛するとは、そこに生命を共感し、なお神の生命を、息吹をそこに与えるくらいの気持になれるからです。

●言葉以前の響き世界

これが祈りの世界なんです。祈りとは、ただ言葉で祈ることではない。魂がぐーっと浸透していくことが祈りなんです。そういうことを言うと、すぐ

「神秘主義だ、やれ汎神論だ」

なんて、くだらないことを言うんだよ、みんな。いわゆる神学者だとか思想家というのは。バカみたいなものだ。何とでも言わせておけばいい。本当の世界が分かってないから。まぁしょうがないね、私の

「無者」

なんてのはどれだけ受けとられるか知らんですよ、正直。

「没弦琴を弾ずる」

という言葉があるね。弦のない琴を弾く。弦が切れて一弦を弾いたという話はある。けれども、弦が無くなって、無弦の琴を弾ずれば、無限の響きがひびくというわけだ。無限無量の響きがひびく。私がここに立って黙ってものを言わないで、

「今日の講義はこれでお終い」

と言ったときに、無限の言葉を本当にキャッチしている人は、もう御霊が満ちて「アーメン・ハレルヤ！」というわけだ。「一体何だ、今日は」なんて（笑）。そういうのを一遍やろうかな。それくらいのことをやり、また応えるような師弟関係にならなければね。お釈迦さんのあの捻華（ねんげ）の話がそうだね。華を捻（ひね）って、そしてニッコリ笑った。その境地をつかんだ。あれはアーナンダだったかね、弟子の誰かです。そういう、言葉以前の世界、響きの奥の世界をつかむ。この言、この響きは、

「語らずいわずその声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねし」（詩篇19・1）

という、詩篇19篇のあの言葉は凄い。あれをみんないい加減な気持で読んでいるけれども。

ここで預言されているキリストというひとはそういうひとであります。らい病人を見れば、彼はらい病人となって、そしてらい病人を癒してしまうわけだ。その境地を本当に憐れんで、それを癒してしまう。癌だってそうだよ。キリストだったら、癌も治してしまう。癌細胞だって参ってしまうよ、キリストの霊的生命には。御霊の祈りでは正直、癌も治った例がありますから。

御霊の世界には不可能はない。ナポレオンが「不可能」という言葉を字引から消したという。けれども、ナポレオンはついに不可能なことにでっくわした。超人的にもの凄くヨーロッパを席捲したけれども、ウォーターローでついに敗北を喫し、セントヘレナに流されて、最後に彼は知った。福音書を読んだら、

「これは文字ではなかった、生き物だ。ナザレのイエスにはかなわん。彼は本当に天と地とをつないだ人だ。この文字は火の如き文字だ、いわゆる文字ではない」

と、ナポレオンは驚いた。彼はイエスの前に降参した。あの告白は素晴らしいですね。さすがはナポレオンです。

●絶対恩寵

「4**まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。**

とんでもない判断をしていると。

5**彼こそはわれらの愆（とが）のために傷（きずつ）けられ、われらの不義のために砕かれ、**

私が言っている「砕け」はこれなんです。

みずから懲罰（こらしめ）をうけてわれらに平安（やすき）をあとう。

これは平安ですよ、平和ではない。われらに平安、シャーロームを与える。

そのうたれし痍（きず）によりてわれらは癒されたり。」

これが贖いです。キリストの十字架、砕けです。キリストは十字架で砕かれた。砕かれて、死を負った。槍で刺された。私たちの罪はあそこに処分されてしまった。我々の罪を負っ

た小羊ではないですか。

「**世の罪を負う小羊を見よ**」

と洗礼のヨハネが言った。だから、キリストのあの十字架によって我という罪が砕かれた。パウロも

「**我は罪びとの首（かしら）なり**」

と言った。あのステパノの殉教までよしとしていたようなやつですから。

「私はとんでもない悪いことをした」

と。本当は牢屋行きだよ、パウロは。今だったら、無期懲役だ。ところが、この無期懲役者――そんな乱暴な言い方をしたのは初めてです――たるパウロが最大の伝道者になったではないですか。なんというドラマチックな展開であるか。キリストの前に本当に参った。

「**なんぞ、我を迫害するか！**」

と言われた。「なんぞ、ステパノを迫害するか」とはキリストは仰らない。

「**刺（とげ）ある笞（むち）を蹴るは難し**」

という。もう無条件降伏、これ以上のものはない。本当に無条件降伏です。

無条件降伏したパウロは

「**我は罪びとの首**」

と言ったが、実は、罪びとの首になったのはキリスト自らであります。キリスト自らが罪びとの首になって、十字架を負ったんです。だから、我々は、キリストの十字架を本当に仰ぎみれば、もうぶっ倒れるよりか仕方がない。あそこに自分は贖いとられて、自我という、神に背くところの罪から完全に解放された。無者にされた。無私、私の無いものにされた。絶対恩寵ですよ、「無者」というのは。悟って無者になるのではない。絶対恩寵です。

「現実の自分がどうだこうだ」

と、そんなことではない。どうだこうだと問題にするなら、十字架は要らん。そうでしょ。今日、はっきり受けとってくださいよ、もし受けとってない人があるならば。

だから、パウロが、

「**われキリストと共に十字架せられたり**」

と言ったではないですか。もはや私は生きてない。

「**われ生く、されど我にあらず**」

と。私が生きているのはもう自分ではない。

「**キリストが、御霊のキリストが、キリストの御霊が私の中で生きていらっしゃる。これを何者が殺すことができるか**」

ということになった。このキリストの盛んなる永遠の生命は、罪なき生命は、神の生命だから、これを否定する何ものもない。

旧約だから、砕けまでしか書いてない。その先の本当に活かすところまで来てません。

これは十字架を通ったキリスト自らが聖霊を降してくださるまではどうにもならない。そこに旧約の限界があるわけです。

「我らに平安を与える」

というけれども、まだこれは平安の前段階です。本当の平安は聖霊が来なければこない。本当の平安というものは、何ものが来ても動じないところの平安です。もの凄い力を持っている。そういうものを頂いたんですから。これは自分が得たのではない。頂いたのなら、もう有り難くてしょうがなくて、何とかしてこれを、苦しんでいる人や悲しんでいる人、悩んでいる人、

「死にたい死にたい」

なんて言っている人に与えようとするわけです。

●ピリポと閹人

「6われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

「置きたまえり」というのは、「投げかけた」というような言い方で強いんです。

7彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、

じっと忍んだ。

屠場にひかるる羔羊の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。8かれは虐待と審判とによりて取り去られたり。その代の人のうち誰か彼が活けるものの地より絶れしことを思いたりしや。彼は民のとがの為にうたれしなり。」（イザヤ53・6～8）

ピリポはイザヤ書53章を読んで語ったわけだ。「一体、誰のことを言っているんですか」と聞かれて、

35ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』　37（なし）

「さぁ、お願いしますよ。もう私は受けとって楽しくて、有り難くてしょうがないから」と。

38乃ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。

水の悔改のバプテスマが同時に聖霊のバプテスマになってしまったと思います。

39彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。40かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣伝えつつカイザリヤに到れり。

とある。どうですか、これは。

「主の霊、ピリポを取り去りたれば」

と書いてある。大変なことです。だから、使徒行伝の現実は驚くべき現実です。見えなくなってしまった。そして、もう別な所で伝道を始める。本当に驚くべき世界ですね。

今のキリスト教が――私はこれだけの現象が起きろと言っているのではないけれども――質的にはもっともっと迫っていかなくては。ということは、質的には同質になれるんです、本当に御霊がくれば。本当に十字架を受け、本当に御霊を受けとれば、質的には同質の世界に入っているのです。それを端的に受けとっていかなくてはいかん。そうしたら、皆さん、あなた方の生活の中で不思議なことが起きてくるから。なるほど霊の世界は、霊法の世界は厳として存するということです。そのようにして私たちは使徒たちと同じように、御霊に本当に酔う人です。

●御霊の人

カビールという詩人の言葉の中に、

「足なくして歩み、目なくして見、耳なくして聞き、口なくして飲み、羽なくして飛び、
食べずして蜜の甘さを味わい、水なくして渇きをいやす。」

という句があります。「足なくして歩む」という。私たちは地上を歩むけれども、実は地上の歩み方が、何かしらんけれども、自分の足でただ歩いているのではないというような意識です。御霊に満ちると、そういうことになる。御霊に満ちて、ある時、私は坂を駆け下りた。飛ぶがごとくに。どうしてこんなに軽いのだろうかと思った。私は夢の中でときどき空に上がっていきますけれどもね。いつもカバンを肩にしょっているから、カバンを落とすと身が上がってしまうなんて冗談を言うんだけれども（笑）。それはそうですよ。

今度、学校で運動会があるから、教科の競争でもし誰かドイツ語の人で弱いのがあったら、私は代わってやろうと思う。必ず私は勝つから。スタートラインに立って、祈り心地になると足が軽くなる。100メートルくらいは楽に走ってしまう。「校長はもう70歳を越えているのに」なんてみんな驚く。まぁ、40歳台以上のやつだったら、大体負けない。30台だったらちょっとかなわないけれどもね。とにかく、不思議なわけです。

エレミヤが書いているでしょ。

「我は神の言に酔えるがごときだ」

と。私たちは神の霊に酔えるがごとくに、

「わが杯は溢るるなり」

という。我という杯は溢れてしょうがない。神の人は酒なくして酔う。手島さんもそうすればよかったな。あれは神の人だから、ちょっと酒を飲みすぎてしまった。

これはジャカルデーンという人の詩の文句です。

「神の人は酒なくして酔い、神の人は肉なくして飽く。神の人は法衣をまとわずして王

である。神の人は貧窮に居りて富裕なり。神の人は限りなき海であり、神の人は雲なくして雨を降らせ、神の人は無宗教と宗教とを越える。神の人には善と悪とは同じである。」

と。超越しているから。この「神の人」というのは、私たちは「御霊の人」と言えばいい。要するに、御霊の人は自在である。自由自在で何ものにもとらわれない。とらわれなくて、一切のものを今度は救い上げていく。大事なことは、この救いあげ、担いあげです。いわゆる霊的に何か誇ったら危ない。どこまでもどん底に立って救う。だから、聖霊は本当に愛の霊である。担いの霊である。

まぁ、世の中は、癪にさわったり、いろんなことがありますよ。そのときに同じ次元に立ったらダメですよ。もうひとつ高いところに出るか、もうひとつ低いところに出るかしなければ。高いところに出るのと低いところに出るのとは同じことなんです。ある時はどん底に立ち、ある時は超越してしまう。そういうことが自在になる。楽しいです。

●責任と光栄

これがピリポの伝道です。彼は、カンダケの宦官エチオピア人を救ってしまったら、もうそれでそこの所は用済みだから、さっと消えて別な所に行く。感謝されている暇もない。皆さん、もうそうなったら、たった一人のひとで一向差し支えない。アタナシウスは「コントラムンドゥス」「全世界に対した」と言う。私が言っているこの「一」の存在が、男であろうと女であろうと、それが全世界よりも重いんです。

「生命を失ったら、全世界をもうけても何の益あらんや。しかし、キリストの生命が来たらば、全世界よりも重い」

という。アトラスみたいに地球を持ち上げてしまう。宇宙を散歩するような魂となる。まず不思議な世界です。

どうぞ、皆さんは、けちくさいクリスチャンにならないように。たった20、30人のひとに語っている福音ですが、けれども、これが爆発するときがくる。君たちはその責任と使命を負っている。これだけの福音を聞いて、いい加減に済むわけにはいきませんよ。もし、いい加減に済んでいいと思う人はもう出て行ってもらおう。責任と光栄とを担っている。あなた方の中でキリストはなしたもう。

「汝らは我よりも大いなる業をなさん」

とは、

「私はお前たちの中に入って、いよいよ大きな業をするぞ」

ということです。人間の持っている相対的な才能とか、そういうことではない。ペテロは無学の凡人（ただびと）ではないですか。これが使徒の土台となったではないですか。そのかわり、聖書の世界に、このドラマの中に、キリストの中に自分を入れることに対しては、左顧右眄

することなく突っこんで行かなくては。あとは祈ります。

●祈り

胸の前で手を合わせてください。しばらく黙祷します。私が最初に祈りますから、あとしばらく自由に祈ってもらいます。幼児の心ですよ。

「**幼児（おさなご）のごとくならずば神の国に入ることができない**」

とキリストが言われた。単純になる。キリストの十字架を、十字架のキリストを瞑想してください。十字架のキリストは私たちのために全部、この我という罪を背負ってくださった。平伏すよりほかに私たちの在り方はありません。このどん底の愛を、この十字架という門をくぐって、詩篇23篇のごとき緑の牧場、憩いの汀（みぎわ）の、聖霊の天津風（あまつ）の馥郁（ふくいく）と香るところの、神の国の事態に私たちを入れてくださる主さま。本当に何も問題はありません。感謝いたします。あなたが私たちの一切を引き受けてくださり、

「もはや問題はない。私を見なさい。私に来なさい」

と言ってくださるから、主さま、参ります。そして、

「この御霊を受けよ。私のこの生命を受けよ。私を肉の肉、骨の骨、霊の霊とせよ」

と。あなたは私たちの生命の生命であります。主さま、あなたは私たちの中に、

「我なんじの中にあり、なんじ我がうちにあり」

と、かくも言ってくださるところの神秘的な一つの現実に私たちを入れてくださって、感謝であります。何か知りませんが、本当にまことの自由と力と光がやってまいりました。感謝であります。いかなる食物も、この世のいかなる哲学も文学も、与えることのできない、この驚くべきあなたの聖書のドラマの中に私たちは入れられました。

福音書のこの弟子どもがどうしても入れなかったけれども、しかし、聖霊が来たらば、彼らは本当に福音書的な現実を現実とすることができるようになりました。それが即ち、使徒行伝でありました。神さま、まことに福音書に続くところの使徒行伝は、聖霊が来たゆえに展開したのであります。かくして、本当に聖霊のないところには何ものも展開しないことをいよいよはっきりと知りました。パウロが「十字架、十字架」と言ったのは、この土台のところでありました。かくして、このキリストの御霊を、パウロがローマ書8章で、

「**御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず。この御霊が来たるところには、この御霊の愛から私たちをいかなるものも離すことができるか**」

と激賞いたしました。私たちはイエス・キリスト、あなたによって、あなたの中に今生きています。空気を吸っているように、あなたの霊気を今吸わせていただいております。絶対無条件の世界です。……イエス・キリストさま、御名を讃えたてまつる。御名こそは私たちのすべてであります。御名によって印せられ感謝いたします。……（録音切れ）……